

扉絵の間 色彩復元の説明文

鳳凰堂は、11世紀日本における職人技と芸術的表現の高さを象徴するような壮大な装飾と絵画で豊かに飾られている。鳳凰堂のメインイメージである阿弥陀仏を考慮すると、これらの装飾は平安時代（794–1185）に日本人が持っていた浄土のイメージだ。

阿弥陀仏の背後にある白い壁面には、雲の上に浮かぶ52の小さな彫刻がある。これらは死者の魂を浄土に迎えながら、楽器を演奏し、歌い、踊り、祈っている。扉や他の壁面には、来迎と呼ばれる、浄土から阿弥陀仏が降下し死者を招く様子を描いた絵画が飾られている。また、四季に分けられた自然の風景が描かれ、春の象徴である桜、秋の象徴である鹿や紅葉などのモチーフも描かれている。国宝に指定されているこれらの作品は、平安時代に栄えた日本の画風である大和絵の現存する最古の九品来迎図だ。また、鳳凰堂には、インテリア全体に宝相華という想像上の花のモチーフが飾られている。これらのすべての装飾は螺鈿で美しく照らされ、天井には66個の銅鏡が埋め込まれ、太陽光を反射し、堂内全体を地球上の天国として、明るい万華鏡のような表現を作り出す。

鳳凰堂の壁、天井、柱、梁などの装飾と元来の色彩は、コンピューターグラフィックによって再現されており、元の画がすべて豪華で鮮やかな色で描かれていることがわかる。このビデオはミュージアム鳳翔館のエントランススペースで見ることができる。鳳凰堂の色は何世紀もかけて色あせていったが、鳳翔館には、その色が最も鮮やかだった1053年の完成後に見られたであろう鳳凰堂東部の実物大の複製が展示されている。